説教「六六六に込めたこと」

申命記四・九～一〇、一五～一八
ヨハネ黙示録　一三・一一～一八

牧師　森田恭一郎

本日は教会の暦で終末主日です。終末にはイエス・キリストが再び到来され、全き御国をもたらして下さいます。御国を来たらせ給え、と祈る通りです。その御国では、キリストがご支配なさり御心が百％成就して歴史が完成します。言い換えると、それまでの歴史は未完成のままだということです。

数字では完全数という概念があります。当時、七は完全数と考えられていました。六は一つ足りない。人間も同じです。福音書に登場する富める青年、「十戒を小さい時から皆守ってきました」と言う青年に主イエスが語りかけました。「**あなたに欠けているものがまだ一つある。もし完全になりたいのなら、私に従いなさい**」（ルカ一八・二二～、マタイ一九・二一～）。どんなに立派な人になっても、一つ足りないものがあった。私たちも完全にはなれない。終末が来るまでは未完成です。

今日の説教題を「六六六に込めたこと」としました。ヨハネ黙示録の今日の箇所に出てきます六百六十六という数字を用いた説教題です。この数字は七百七十七に足りない未完成を表しています。未完成を表すなら、六だけでも良いのに、六百六十六になっているのは、もう一つ意味を表すためです。当時、英語で言うアルファベットの文字の一つ一つに対応する数字があったそうです。ここでの解釈の一つは、当時のローマ帝国の「皇帝ネロ」のギリシャ語をヘブライ語で表記したアルファベットの数字を足していくと六百六十六になるそうです。ただ、足してこの数字になる言葉は他にも沢山あり得る訳ですから、この数字からだけでは「皇帝ネロ」とすぐ分かる訳ではありません。黙示録が、**ここに知恵が必要である。賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している**（一三・一八）と語る知恵とは、数字を理解する知恵です。皇帝ネロ、そしてその後のローマ皇帝のことを指していると分かる人は分かるそういう知恵です。

そして、ローマ皇帝が支配する当時の歴史の中で、数字を理解する以上の、やはり知恵が必要だった。知恵という言葉を聞いてすぐ思い起こすのは箴言の言葉です。**主を畏れることは知恵の初め**（箴言一・七）。主を畏れる。これを今日の旧約聖書でも語っています。**ただひたすら注意してあなた自身に十分気をつけ、目で見たことを忘れず、生涯心から離すことなく、子や孫たちにも語り伝えなさい。あなたがホレブであなたの神、主の御前に立った日、主は私に言われた。「民を私のもとに集めなさい。私の言葉を彼らに聞かせ、彼らが地上に生きる限り、私を畏れることを学び、またそれを子らに教えることができるようにしよう」**（申命記四・九～）。モーセは主の御前に立ちつつ、御言葉を効きました。当時のユダヤ教教育の中心点は「主を畏れることを学ぶ」ことです。そして主を畏れることを私たちに妨げる第一のこととして　偶像を挙げています。再び注意喚起するようにして記します。**あなたたちは自らよく注意しなさい。主がホレブで火の中から語られた日、あなたたちは何の形も見なかった。堕落して、自分のためにいかなる形の像も造ってはならない。男や女の形も、地上のいかなる獣の形も、空を飛ぶ翼のあるいかなる鳥の形も、地上を這ういかなる動物の形も、地下の海に住むいかなる魚の形も。**

主なる神様は、御言葉を語り、そのお姿を形にして現れることはしない。だから偶像を造ってはならない、それを拝んではならない。偶像は口があっても話せず、目があっても見えない。生きていないからです。聖書の神様は生ける神様です。そのお姿は見えなくても生ける神様の御前に立ち続けること。その知恵が主を畏れることです。

教会も知恵が必要です。なぜなら教会も信仰者も見える世界にありますから、見えないものにではなく見えるものに振り回される危うさをいつも抱えているからです。

ヨハネ黙示録の諸教会を取り囲んでいた歴史の見える姿、それは過酷なものでした。一三章には二匹の獣が登場します。一匹目は皇帝ネロ、二匹目はその後の皇帝たちのことでしょう。一一節以下は第二の獣ですが、この獣は人々を惑わせ、獣の像を造り、この像を拝まない者があれば皆殺しにした。キリスト教徒の殉教です。そして獣の刻印を押し、刻印がなければ者の売り買いを禁止、社会生活が出来ないようにした。

それが当時のキリスト教徒を取り囲んでいた見

える過酷な歴史の姿です。信仰を貫くと殉教さえ強いられました。

黙示録は過酷な苦難の状況の中で、イメージを描きます。それは神と悪との戦いのイメージです。それを地上の視点から見ると、ローマの獣の勝利のように見える。キリスト教徒は追いやられ殉教を迫られる。神は何も助けて下さらないのか……。でも、この歴史状況を天上の視点で見ると、神の勝利が見える。何故か？

十字架のキリストに思いを馳せます。主イエスはユダヤ指導者たちやローマのピラトの下で、十字架に追いやられた。地上の視点では神の勝利は見えてきません。でも天上の視点で見ると、十字架のキリストは、その死を以て全人類の罪を贖い取って下さった。神の完全な勝利です。よく譬えられるのが魚釣りです。魚は餌に食いつく。魚の勝ちです。でもガブリッと食いついた次の瞬間、釣り針に取られてしまいます。魚の負けです。

悪魔は十字架の主イエスに勝利した、と見えた。でも、次の瞬間、罪を贖うキリストの勝利です。そして三日目に死人の内から甦られました。弟子たちはその三日間、絶望の中に突き落とされた。でも、あしかけ三日間でした。黙示録の時代の諸教会は、ローマ皇帝の権力が猛威を振るう、それは三日間で終わらなかった、三百年近くかかる。ローマ皇帝が迫害をやめてキリスト教を公認したのは、紀元三一三年。それまでの間、当時の教会と信仰者たちには**忍耐と信仰が必要**でした(黙示録三・一〇)。そして**知恵が必要**です(同一八節)。

戦後の教会と信仰者の私たちは、日本国憲法の下、思想信教の自由が保障され、それまでのような迫害は無くなりました。でも教会には伝道の困難な時代は続いているし、信仰者の一人ひとりの生活は、やはり辛い時もある。これは地上の視点で見えてくる現実です。忍耐と信仰が必要です。でもその苦しみを天上の視点から見る、信仰の視点を以て見る。すると異なる光景も見えてくるのではないでしょうか。

キリスト教徒にとって苦しみは、十字架の主イエスの苦しみを一番身近に思える時ではないでしょうか。主イエスが共にいて下さると一番思える時です。苦しみの中にある時、神などいるものかと、神様から離れていくのではなく、私の苦しみを負って、そこにキリストの十字架の苦しみがある。すると、私たちもキリストと共にいる信仰に生きることが出来る。

またもう一つ苦しみの意味を加えるなら、主イエスが十字架の苦しみを経てお甦りになられた歩みに、自分の苦しみと望みを注意深く重ね合わせ、そうしながら、私たちもキリストの苦しみと勝利に与っていく、これが私たちの営みになる訳です。

ヨハネ黙示録は当時の過酷な状況に囲まれる中で、ローマ皇帝に従うのか、キリストに従うのか、二者択一を迫っているようにも読めます。二人の主人に兼仕えることは出来ないと。戦前の日本では、キリストに従い、捕らえられ、獄死した牧師たちもいます。以前も語りましたが、戦前の当教会でも宮城礼拝を強いられました。当時の谷口牧師はある日の説教題を「わが心、主を崇む」としました。表向き、天皇陛下万歳と宮城遙拝を強いられながらも、心では主キリストを崇めるのだと精一杯の信仰を明らかにしていたのだと推察します。夫々の知恵があり、主を畏れる決断をした。形はどのようなものであれ、主を畏れる知恵が内にあることが大事です。判断を誤ることもあるかもしてない。でも主を畏れる知恵があれば、悔い改めて戻る歩みになっていく。

私たちはこの異教社会の文化の中で、信仰者として御前に立ちつつ、上手に社会生活をして行かなければなりません。だからこそ、キリストの御前に立ち、畏れることから外れないようにします。そこで求められるのは、見える現実を歩む知恵です。その知恵は、むしろ積極的に地域に橋渡しをしていく知恵となり得るのだと確信します。